

機関番号 : 13601

研究種目 : 若手研究 (B)

研究期間 : 2008~2010

課題番号 : 20720012

研究課題名 (和文) インド仏教認識論と分析哲学における知覚論の比較研究

研究課題名 (英文) A Comparative Study of Theory of Perception in Indian Buddhist Epistemology and Analytical Philosophy

研究代表者

護山真也 (MORIYAMA SHINYA)

信州大学・人文学部・准教授

研究者番号 : 60467199

研究成果の概要 (和文) : 本研究は、ダルマキールティの『プラマーナ・ヴァールツェイカ』第三章後半ならびにラトナキールティの『多様不二照明論』の解読研究に基づき、外界対象、形象、自己認識という三要素を整合的に理解する方策、ならびに形象真実論と形象虚偽論との対立に絡む概念知の働きを解明した。また、W・セラーズによって提起された「所与の神話」とも重なる論点に関連して、解脱論と結びつく合理性を考える仏教認識論の体系では、形象は経験的知識の基礎づけの役割を担うわけではないことが明らかにされた。

研究成果の概要 (英文) : On the basis of text-analysis of Dharmakīrti's *Pramāṇavarttika* III 448-459 and Ratnakīrti's *Citradvaitaprasāsavāda*, the present study has clarified a way for understanding the complex among external objects, mental images, and self-awareness in the Buddhist theory of perception, and the role of conceptual constructions (*vikalpa/kalpanā*) or perceptual judgments (*adhyavasāya*) discussed in the controversy between the views holding cognition with false mental images (*alīkākāravāda*) and cognition with true mental images (*satyākāravāda*). Although the latter problem might be connected with W. Sellars's argument known as "Myth of Given," which questions whether mental images are propositional or not, it should not be overlooked that Indian epistemology that presupposes a certain rationality connected with its own soteriology does not regard the mental images, unlike sense data, as the foundation of empirical knowledge.

交付決定額

(金額単位 : 円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野 : 人文学

科研費の分科・細目 : 哲学・印度哲学・仏教学

キーワード : 比較思想, 形象, センスデータ, ダルマキールティ, ラトナキールティ, 自己認識, 知覚, 合理性

1. 研究開始当初の背景

眼前の世界に対して私たちは第一に知覚という認識作用を通してアクセスを行う。こ

の知覚の生成をめぐって、古代インドの哲学者たちは、感覚、概念、そして宗教的直観を織り込んだ知覚理論を展開してきた。その知

覚論は、西洋哲学の長い伝統で培われた知覚論とはまた違う特色をもつものであるが、それはまた同時に、人間の普遍的な思考の産物として、幾つかの興味深い一致点も併せ持つ。

本研究を開始するにあたり、筆者はこれまでの研究成果を踏まえ、インド仏教認識論における知覚論の特徴を「解脱志向型」として捉え、彼らの知覚論では、経験世界の認識が記述される際にも、必ず背景においてブッダの認識（智慧）、そしてその目的達成へと向う修行者の超越的認識への眼差しが、明示的・暗示的仕方で論じられているとの作業仮説をもつに至った。

このようなインド仏教認識論の特徴を明確にするために、筆者が注目したのは比較思想的な手法である。

この手法は、本邦では、中村元博士による『比較思想論』（岩波全書、1959）で提唱されたものであるが、十分にその手法が確立されたものとは言い難い状況であった。一方、海外、特に英米で活躍するインド哲学研究者の間では、従来の文献学の成果を認めた上で、比較哲学的手法を用いて、インド哲学の諸概念を広く「哲学」のコンテクストで確定してゆこうとする動きが高まっていた。本研究との関連では、B.K. Matilal が *Perception: An Essay on Classical Indian Theories of Knowledge* (Oxford, 1986) において、インド哲学の知覚論と英米分析哲学の議論との比較を試みており、また、T.J.F. Tillemans は *Materials for the Study of Āryadeva, Dharmapāla and Candrakīrti* (Vienna, 1990) にて A. J. Ayer のセンスデータ論に言及しつつ唯識思想を論じていた。また、W. Sellars による所与 (given) 論批判の議論を援用しつつ、カマラシーラの知覚論の特色を描き出した S. McClintock の優れた論考“The Role of the ‘Given’ in the Classification of Śāntarakṣita and Kamalaśīla as Svātantrika-Mādhymikas” (*The Svātantrika-Prāsāngika Distinction*. Boston, 2003, pp. 125-172) も、知覚論の比較研究の可能性を示唆するものであった。

これら海外の研究動向を受け、筆者もまた2007年、カルカッタで開催された比較論理学のシンポジウム (Logic, Navya-Nyāya and Applications, 3-7 January, 2007, Jadvpur University) において、“Sense data and ākāra”と題する発表を行い、本研究の基盤となるアイデアを披露した。すなわち、20世紀前半に議論されたセンスデータを巡る諸議論は、仏教認識論で論じられる「形象」概念を把握するためにも有効な視点を提示するものであるが、「知識の基礎づけ」を担うセンスデータに対して、形象の方は、必ずしもそのような基礎づけ主義的な発想では捉えられないという視点である。

本研究は、以上の学術的な背景のもとに着

手されたものである。

2. 研究の目的

仏教認識論における知覚を知るためには、ディグナーガ (5世紀) の『認識論・論理学集成』 (*Pramāṇasamuccaya*) 第一章とそれに対するダルマキールティ (Dharmakīrti, 7世紀) の『認識論・論理学評釈』 (*Pramāṇavārttika*) 第三章が基礎となる。とりわけ、「形象」という概念を解明する鍵となるのは、同章後半で論じられる自己認識 (svasaṃvedana) 論である。この議論は、注釈者であるプラジュニャーカラグプタ (Prajñākara Gupta, 8世紀) や、さらに後代のラトナキールティ (Ratnakīrti, 10-11世紀) の知覚論において発展的に継承されてゆく。

本研究の目的は、これらの議論で論じられる形象という概念を明瞭にし、それを20世紀前半の分析哲学で論じられたセンスデータ論と比較しながら、その哲学的意義を探ることにある。

この目的を果たすために、当初、次のような具体的な目標を設定し、その実現を目指した。

- a) 一次資料となるダルマキールティの『認識論・論理学評釈』第三章 320-539 偈、ならびに同箇所に対するプラジュニャーカラグプタの注釈の批判的校訂に基づく解読作業を行うこと。
- b) 解読の結果得られた「形象」に関する諸理論を、B. Russell, H.H. Price, A.J. Ayer 等によって理論化されたセンスデータ論と比較検討すること。
- c) J.L. Austin, W. Sellars 等によるセンスデータ理論への論駁が、はたしてインド仏教認識論における「形象」論に対する批判としても有効であるのか否かを検討すること。
- d) 宗教的真理の直観 (ヨーガ行者の知覚) というインド仏教認識論に固有の議論を分析し、解脱論と密接に結びついたインド仏教認識論の特色を明らかにすること。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、それぞれの具体的な目標に対して、以下のような方法で研究を進めてきた。

- a) 一次資料となる『認識論・論理学評釈』第三章後半部分のテキスト校訂・解読作業に関しては、同時期に同章の解読研究を進めていた海外の二つの研究グループ、すなわち、E. Franco 教授を中心とするライプチヒ大学の研究グループと B. Kellner 教授を中心とするウィーン大学の研究グループとの連携を図る。

また、国内においては、稲見正浩教授 (東京学芸大学) が主導するプラジュニャーカラグプタ研究会に参加し、稲見教授をはじめとする研究会のメンバーとの学術交流を深め、

一次資料分析の助言を得ることに努める。

同時に、筆者が所属する信州大学図書館に不足しているサンスクリット語・チベット語文献の蒐集を行い、データベース化の作業を行う。

b) 分析哲学におけるセンスデータ論に関する著作・論文の蒐集を行い、インド仏教認識論における「形象」論との比較のための準備を進める。

c) 同じく、センスデータ論に対する批判を展開したセラーズなどの著作・論文を蒐集し、その議論を整理する。

d) インド仏教認識論に特徴的な宗教的直観がもつ意味について、その伝統の背景となる唯識思想との関連性、認識の源泉としての聖典の役割を解明するために、『認識論・論理学評釈』で論じられる「聖典に依拠する推理」(āgamāpekṣānumāna) に関する議論、ラトナキールティの『多様不二照明論』(Citrādvaita-prakāśavāda) の解読研究を進める。

4. 研究成果

まず、本研究の基礎となる『認識論・論理学評釈』第三章後半部分の解読に関しては、研究期間を通して、作業を進め、ダルマキールティの「形象」概念と自己認識との関連について次のような成果を得た。

(1) 2008 年度には、ウィーン大学を訪問し、PV III の文献学的研究をプロジェクトとして進めている B.ケルナー博士と面会し、R.サーンクリトヤーヤナが PV 校訂に利用した写本 (PV-H) のデジタルコピーを共有できる環境を整えた。また、同博士と PV III 自己認識関連個所のテキスト再校訂作業についての方針と計画を確認した。

(2) 上記の資料を含む、新資料に基づく『認識論・論理学評釈』第三章の新たな校訂可能性を、同章 192-193 偈から示すことができた。すなわち、この二つの詩節が意味するところは従来、不可解なものとしてきたが、ジネンドラブディの『集量論注』他の資料から再考して、従来のテキストに過誤があったことが確認された。このテキストの訂正により、「知覚」(pratyakṣa) の語義解釈をめぐるダルマキールティの議論の背景には、クマールラによるディグナーガ批判があることが想定された。この成果は、『印度学仏教学研究』に発表した。

(3) 『プラマーナ・ヴァールツィカ』第三章 448-459 偈の解読に基づき、外界を認める経量部的な認識論における自己認識の役割について、平成 20 年度に開催された国際仏教学会 (IABS) での口頭発表を論文の形で公表した。有形象認識論では、外界を知覚する際に、認識内部に対象の形象が形成されるとするが、その形象を反省的に認識する自己認

識を認めるとすれば、仏教が言う認識手段と認識結果とは同体であるという説が破綻する。ダルマキールティは、この難点を自覚した上でなお、主客構造をもつ自己認識から、主観性を確立する純然たる輝きとしての自己認識へとその概念を変えることで、自派の見解を擁護した。この考察から、インド仏教の形象論においては、ヨーガ行者の他心知を含む超越的認識を視野に入れることが重要であることを確認し得た。

また、上記の成果を英米分析哲学におけるセンスデータをめぐる議論と比較する過程において、次の成果を得た。

(4) センスデータによる知識の基礎づけを試みた B・ラッセルをはじめとする哲学者たちは心の働きの中心に理性に基づく「合理性」を求める。一方、「理性」に厳密に対応する概念をもたないインド仏教認識論においては、西洋と同種の「合理性」概念を見出すことは難しい。しかしながら、ダルマキールティならびにその後継者たちは、修行者たちがいかにして複数の選択可能な聖典の中から唯一の信頼ある聖典を選別し、その聖典に依拠して宗教的実践を開始するか、という心的プロセスを分析し、そこにある種の合理的な判断能力があることを説いた。この場合の合理的な判断能力とは、未来の果報を予測する推論の能力、そして、複数の聖典から不適切な聖典をすべて排除し、適切な聖典を選び取るための蓋然的推論の能力のことに他ならない。つまり、彼らにとっての「合理性」とは、純然たる論理に裏付けられたものではなく、人々を説得するための類推的な論理に基づくものであると考えられる。また一方で、彼らは人間の理性的判断はより根源的な、習慣化された感情や欲求のために覆されること、すなわち、アクラシヤ的な状況があることを十分に自覚していた。そのために、彼らは感情や欲求の習慣化に抗するための、瞑想の反復経験を重視した。彼らが目指したものは、単なる「合理的な知識」ではなく、「合理的な智慧」とでも呼ぶべきものである。

最後に、このような宗教的議論と密接に結びつくインド仏教認識論の特徴を、その前提となる聖典論、さらにその背景となる唯識思想とのつながりから考察し、以下の成果を得た。

(5) ダルマキールティの聖典論を語る上で重要な概念の一つに「聖典に依拠する推理」(āgamāpekṣānumāna) がある。これは、正しい認識手段の一種である推理を区分したとき、「実在の力で起きる推理」、すなわち経験的な推理とは一線を画す、人間の認識能力を

超えた事象に関する、聖典の言葉に由来する推理のことである。この型の推理については、これまで不明な点が幾つか残されていたが、今回、この推理が機能する際には、「他学説の暫定的承認」(abhyupagama)という要素が重要な働きをすることを明らかにし、さらに、この背景にはインド哲学における「討論の伝統」(vāda-tradition)があることを、2010年に開催された国際サンスクリット学会にて発表した。

(6) 経験的知識の基礎づけを担うセンス・データについて、ウィルフリッド・セラーズは非言語的なセンス・データが言語的な信念の基礎となりえないことを指摘したが、形象の存在論的身分をめぐる後期インド仏教における形象真実論と形象虚偽論との対立においても、その両者の分岐点は、形象の生成に言語的な概念知が関与するか否かという点に求められる。唯識思想を基盤として形象の問題を考える彼らにとって、形象は経験的知識の基礎を担うものではなく、むしろ経験的知識を超えた宗教的直観との関連で論じられるものではあるが、その議論を知覚論一般として捉えなおすとき、そもそも非言語的な形象がありうるのか、という疑問が浮かびあがる。この疑問に対して、ラトナキールティの『多様不二照明論』と形象虚偽論者であるラトナーカラチャーティの『唯識性証明』とのテキスト解説・比較対照を行い、両者の唯識性論証の議論に、それぞれの形象理解—形象は言語的なものか否か—が反映されていることを明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 護山真也, 「ラトナキールティ著『多様不二照明論』和訳研究(上)」, 『南アジア古典学』第6号, pp. 51-92, 2011, 査読有
- ② 護山真也, 「形象虚偽論と多様不二論(上)」, 『人文科学論集<人間情報学科篇>』(信州大学), 第45巻, pp. 23-41, 2011, 査読有
- ③ Moriyama, Shinya, “On Self-Awareness in the Sautrāntika Epistemology”, in *Journal of Indian Philosophy*, 38, pp. 261-277, 2010, 査読有
- ④ 護山真也, 「プラジュニャーカラグプタによる主宰神の全知者性批判」, 『人文科学論集<人間情報学科篇>』(信州大学), 第44巻, pp. 21-36, 2010, 査読有
- ⑤ 護山真也, 「*Pramāṇavārttika* III 192-193について」, 『印度学仏教学研究』, 第56巻第1号, pp. 114-119, 2008, 査読有
- ⑥ Moriyama, Shinya, “Sense data and *ākāra*”, in *Studies in Logic: Logic, Navya-Nyāya &*

Applications: Homage to Bimal Krishna Matilal, pp. 205-216, 2008, 査読有

[学会発表] (計3件)

- ① 護山真也, 「インド哲学における解脱論と合理性—ダルマキールティの宗教論を中心に—」, 中部哲学会シンポジウム「合理性について」(招待講演), 2009.10.4, 金沢大学
- ② Moriyama, Shinya, “On scripturally based inference (*āgamāpekṣānumāna*) in the contexts of *sāstraviruddha* and *viruddhāvabhicārin*”, The 14th World Sanskrit Conference, 2009.9.2, Kyoto University.
- ③ Moriyama, Shinya, “The Status of Self-awareness in the Sautrāntika Epistemology”, The XIVth Congress of the International Association of Buddhist Studies, 2008.6.28, Emory University (USA).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

護山 真也 (MORIYAMA SHINYA)
信州大学・人文学部・准教授
研究者番号: 60467199